

【19世紀フルートと19世紀ギターによる初期ロマン派ウィーンの風】

M.ジュリアーニ：セレナードト長調

マウロ・ジュリアーニの「セレナードト長調」は、フルート（またはヴァイオリン）とギターのために書かれた二重奏曲。主題と変奏を含む单一の流れで構成されており、19世紀初頭のウィーンで活躍したジュリアーニらしい、優雅で華やかな旋律と技巧的なギター伴奏が調和している。

シューベルト（J.K.メルツ編）：《白鳥の歌》より 愛の便り、セレナーデ

《白鳥の歌》は、シューベルトの死後、出版商のハスリンガーによって編集・発表された。《美しき水車屋の娘》《冬の旅》とともに、彼の「三大歌曲集」に数えられている。今回は全14曲の中から2曲をギター・ソロでお届けする。

《白鳥の歌》の劈頭を飾る「愛の便り」は、ピアノが瀬音を描写するなか、「僕はすぐに帰るから」と、家路を急ぐ想いを小川に託す。「セレナーデ」は《白鳥の歌》の第4曲で、お馴染みのメロディに乗せて、「君を呼ぶナイチングールの声が聞こえないのか？」とささやく。

ディアベリ：ベートーヴェンの有名主題によるポプリ

ディアベリの「ベートーヴェンの有名主題によるポプリ」は、1820年代前半に出版されたベートーヴェンの代表的な旋律をメドレー風につなげたピアノ独奏曲。「交響曲 第7番」の第2楽章や「七重奏曲」などが含まれており、当時は家庭用の「ヒット曲メドレー」として親しまれた。

シューベルト（柴田俊幸／鈴木大介編）：アルペジオーネ・ソナタ

ウィーンの楽器製作者シュタウファーが1823年に発案した「アルペジオーネ」というフレット付きの弦楽器は「チェロのように弾くギター」だったが、普及には至らなかった。本作は、アルペジオーネのために書かれた、おそらく現存する唯一の楽曲で、ヴィオラ、チェロ、ギターなど様々な楽器で演奏されている。シューベルトならではの哀愁を湛えた音楽は（当の楽器はさておき……）愛奏・愛聴され続けている。

M.ジュリアーニ：協奏的大二重奏曲 op.85

マウロ・ジュリアーニの「協奏的大二重奏曲」は、1817年頃にウィーンで出版されたフルート（またはヴァイオリン）とギターのための二重奏曲。ギターが単なる伴奏にとどまらず、フルートと対等に渡り合う、華やかで技巧的なスタイルを特徴としている。

全4楽章から構成され、「第1楽章：Allegro maestoso」は、華やかなソナタ形式で、フルートとギターが技巧的なフレーズを交わす。「第2楽章：Andante molto sostenuto」は、叙情的な緩徐楽章。ギター伴奏に乗せてフルートが哀愁を帯びた旋律を奏でる。「第3楽章：Scherzo: Vivace」は、軽快で躍動感のあるスケルツォ。中間部には穏やかなトリオが挟まれている。「第4楽章：Allegretto espressivo」は、ロンド形式に近い軽妙な終曲。《魔笛》のパパゲーノを想起させるメロディやウェーバーの影響なども感じさせるワルツ風の調べが魅力的。